保育者を目指す短期大学生の保育者効力感に関する研究（4）

- 入学後から卒業までの保育者効力感と子ども観の関連について -

○永田彰子[1]・中村　涼[2]・記谷康之[3]#・橋本信子[2]#・大島久雄[2]#・永田雅彦[2]#
([1]安田女子大学・[2]安田女子短期大学・[3]広島修道大学)

【目的】　筆者らは、2010 年 4 月に A 短期大学保育科に入学した学生を対象として縦断研究を行っている。本研究では、保育者を目指す学生の保育者効力感と子ども観の観点から、入学直後より卒業時までの変化を明らかにすることを目的とする。

【方法】　調査協力者：2010 年 4 月に A 短期大学保育科に入学した女子学生 169 名であった。このうち、10 回の調査ですべての項目に回答した 98 名を対象とした。　調査時期：1 回目は 2010 年 4 月入学式翌日のガイダンス時、2 回目は 2010 年 5 月上旬、2 泊 3 日のオリエンテーション研修後、3 回目は 2010 年 6 月下旬で、初めての実習である幼稚園における観察実習直後、4 回目は 2010 年 12 月上旬で、部分指導を含む 1 週間の幼稚園実習、福祉施設における 1 日参加実習、大学祭において学科で企画した地域の子ども達とのふれあいを経験した後に実施した。5 回目は保育所実習後の 2011 年 2 月、6 回目は 2011 年 6 月末で、1 週間の幼稚園実習および 2 回目の保育所実習後に実施した。7 回目は施設実習後の 2011 年 9 月、8 回目は 2011 年 10 月で 2 週間の幼稚園実習後、9 回目は 2012 年 1 月の学期末、10 回目は 2012 年 3 月卒業式日であった。調査内容：保育者効力感尺度については中村多見（2006）の 13 項目を用い、「非常にそう思う（5 点）」から「ほとんどそう思わない（1 点）」の 5 件法で尋ねた。子ども観については、宮沢・増田（2009）の 10 項目を用い、「非常にそう思う（5 点）」から「ほとんどそう思わない（1 点）」の 5 件法で尋ねた。なお、調査用紙は、これらの項目の他、保育職に対する志望・自信、増田・宮沢（2007, 2008, 2009）、宮沢・増田（2009）の保育観に関する尺度、善本・善本（2008）の社会的スキルに関する尺度で構成されていた。

【結果と考察】　保育者効力感について調査時期による分散分析を行ったところ、調査時期の主効果が認められた。各調査時期について Ryan 法による多重比較（5%水準）を行ったところ、保育者効力感は、入学時、1 年次 5 月、1 年次 2 月、2 年次 9 月、2 年次 10 月、2 年次 1 月、2 年次 3 月が 1 年次 6 月、12 月より高い得点を示し、さらに入学時のみ 2 年次 6 月よりも高い得点を示した（図 1）。

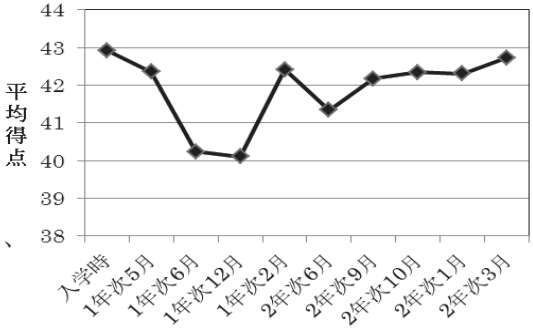

図１　各調査時期における保育者効力感

子ども観(自立・従順)についても調査時期による分散分析を行ったところ、子ども観×調査時期の交互作用が有意であったので、交互作用について単純主効果の検定および Ryan 法による多重比較（5%水準）を行った。その結果、「自立」の場合、入学時、1 年次 5 月と 1 年次 6 月は、その他の時期よりも高い得点を示した。「従順」の場合、1 年次 12 月と 1 年次 2 月が入学時および 1 年次 6 月より高い、2 年次 9 月が入学時、1 年次 5 月、1 年次 6 月よりも高い、2 年次 10 月が入学時、1 年次 5 月、1 年次 6 月、1 年次 12 月、1 年次 2 月、2 年次 6 月よりも高い、2 年次 1 月が入学時、1 年次 5 月、1 年次 6 月、1 年次 12 月、1 年次 2 月、2 年次 6 月よりも高い、2 年次卒業時が、入学時、1 年次 5 月、1 年次 6 月、1 年次 12 月、1 年次 2 月、2 年次 6 月、2 年次 9 月よりも高い得点を示した（図 2）。つまり、学生は実習等を経験するなかで子どもの理解が深まり、「自立」に関する子ども観は弱まり、一方で「従順」な存在としての子ども観は強まると考えられる。さらに、保育者効力感と子ども観（自立・従順）の尺度間相関を求めたところ、保育者効力感と子ども観「自立」は弱い正の相関（r=.22）、保育者効力感と子ども観「従順」は関連が示されなかった（r=--。05）。すなわち、保育者として効力感を感じる学生は、子どもは「自立」的であると考えている可能性がある。

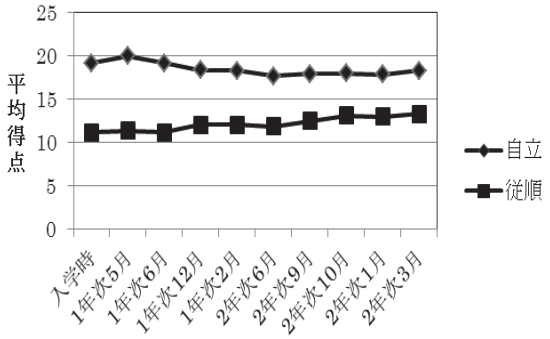

図２　各調査時期における子ども観（自立・従順）